

黒沢地区地元の歴史探訪会（町付編）開催要項

**黒沢地区地元の歴史探訪会**

1、目的 知っていそうで知らない地元の歴史を探訪し、また歩くことにより区民の健康増進と体力の向上を図り、併せて区民の交流親睦を図り、明るい地域社会づくりに寄与する。

2、主催 黒沢地区体育祭実行委員会

3、講師紹介 **飯村 尋道** 先生 昭和23年大子町大字中郷生まれ  
元学校教師 旧黒沢小学校教頭先生歴任  
現在は常陸大宮市山方に在住で、歴史研究家として茨城郷土史研究家「著書」故郷60年八溝山麓の山里を歩いて他に多数の著書があります。

4、期 日 令和5年11月4日（土） 小雨決行

5、探訪行程 大字町付地内  
9:00 交流センター出発 → 鷹ノ巣橋 → 上町 → 旧黒沢小周辺（飯村家・慈雲寺）→ 町付城 → 下町裏通り → 近津神社 → 待月橋 → 11:00 交流センター着

6、参加者数

地区名	人数
上野宮	6
上郷	4
中郷	4
北吉沢	3
町付	24
合計	41

日 時 : 令和5年11月4日（土）8時30分集合

歴史探訪会 : 大字町付編

開 会 式 : 黒沢コミュニティーセンター

閉 会 式 : 黒沢コミュニティーセンター

開 会 式

- 1、開式のことば
- 2、実行委員長あいさつ
- 3、講師あいさつ
- 4、注 意 事 項
- 5、閉式のことば（開会式終了後に、集合写真の撮影をします）

閉 会 式

- 1、開式のことば
- 2、実行委員長あいさつ
- 3、閉式のことば

## 町付の歴史散歩

(令和五年十一月四日、集合八時半、出発九時〜十一時)

飯村 尋道

### ①「黒沢」と「八溝」の語源

高笹山の妖鬼、昼猶夜の如し、故に黒沢、これより奥は真つ暗やみぞ 「白河古事考」(文化元年)  
黒沢や やみその山の名もつらし 年に稀なる月の光に 水戸光圀

(元禄十一年八月十四日、武助宅高楼での月見詩歌会)

### ②旧街道筋を物語る道測の道標「右やみそ道、左金沢道」

### ③昔の本街道、上町通りの繁栄と衰退

大正の頃までくく下町りく化粧坂(げばい坂)く上町く鷹ノ巣坂く

(\*下町よりも上町、上町よりも鷹ノ巣が店がいつぱいあって賑やかだった)

大正十二年くく化粧坂と鷹ノ巣坂の難所から、役場下の崖を削る難工事を経て待月橋を架橋し白坂に抜ける新道が完成。上町通りが廃れ大店衆は下町へ下りる(志たてや、いしや、渡辺酒屋、

駐在所・・・)

### ④上町の弥勒のお地藏さん(おうら地藏)

飯村おうら(文久二年生まれ)「首のネエお地藏様があつた所で、その首のネエお地藏様が夢知らせで出てきた」と一人でシュモリ。昭和五年に部落で管理、寄附を募り地藏像を購入し御堂を建てる。

ところが、昭和六十年頃、御堂下の鷹ノ巣坂の道路改修工事で大河原昭二さん泥の中から発見。

飯村朝之助さん「話には聞いていたがまさか出だすとは浮かばれたよ。首が無くては可哀想と八溝

川でひらつてきた丸い石をくつつけた」(左側のお地藏さん)

### ⑤水戸義公(水戸藩二代光圀公)の立ち寄った飯村家と清音楼

義公は元禄八年八月十四日、二階建ての高楼(清音楼)で田野草山に昇る名月を観て

都にて眺めしよりも優りけり この山里の月の光は

飯村宗興(通称、武助) 義公に可愛がられ五十石取りの郷士。高德寺に墓碑あり。

### ⑥水戸義公ゆかりの慈雲寺

水戸義公の宿所、末寺九十三ヶ寺の名刹、度重なる火災で義公拝領の屏風も雪村の絵も焼失。

山門の貫(横木)は佐竹時代。本尊(千手観世音菩薩)の腰から下は室町時代の作。

### ⑦黒沢小学校の輝かしい歴史と校風

明治六年開校、児童数の最高時は昭和三十四年(飯村が五年生の時で、本校五五四人、上野宮小二五三人、合わせて黒沢の児童数八〇七人)、平成三十年閉校(児童数一七人)

### ◆黒沢小学校々歌

明治四十一年四月整定、作詞・佐佐木信綱、作曲・田村虎藏(東京高等師範学校教授)

黒沢小の耐火金庫に一通の書留封書あり。十銭切手貼付の消印は「東京神田一ツ橋通」郵便局。

表の宛名 「茨城縣久慈郡黒澤村、町付小学校長、江幡良哉殿」

裏の差出人 「東京高等師範学校附属小学校」

\*江幡良哉校長は「人格高潔識見卓越手腕力量拔群の名校長」と絶賛(飯村紀一翁談)

佐木信綱「夏は来ぬ」(明治二九)、「水師營の会見」(明治三九)の作詞

田村虎藏「花咲かじじい」「青葉の笛」「一寸法師」「大こくさま」「金太郎」の作曲

◆黒沢小学校々歌「高笹の山、嶺秀で」の碑（飯村紀一書）

◆校庭の鈴懸の木（プラタナス）

「昭和五年五月十七日、晴二十二度、第五校時、高三（高等科三年）児童を督して、自宅の井戸端脇にあつて作物の陰をするプラタナスを掘取つて校庭に植えた」（松浦斤也「日記」）  
大河原新寿（昭和二年三月、大子農学校卒業記念）

◆益子久治校長顕彰碑「徳不孤」の碑

「徳不孤」（学習院大学長安倍能成先生篆額、松浦斤也撰文、飯村紀一書）

徳のある人は、孤立することなく必ず他人を感化し、人が付いてくるの意味

◆「教育勅語下賜四十年記念」国旗掲揚旗立石（昭和五年十月三十日）\*平成二十二年に出土

「教育に関する勅語」発布（明治二十三年十月）、「御真影」拜戴（明治三十年十二月）

昭和二十年十月、進駐軍（米軍）ジープで来村、天皇陛下の軍装及び宮城二重橋の写真、詔勅に関するもの、軍国主義的なものの提示、使用の禁止、撤去を村当局に指令。一切を校庭で焼却する。翌二十一年、物件温存査察の為、米兵完全武装にて再度来校、軍靴の俣、職員室、教室へ。

◆敵国人形と迫害された「青い目の人形」

昭和二年一月、日米親善使節として米国の子供たちから贈られる（二二、七三九体）。

茨城県に二四三体（戦時中の焼却で現存は八体のみ）

「昭和二年四月二十八日（木）晴。アメリカ人形歓迎会、米国の世界児童親善会から寄贈になったお人形の歓迎会・・・」（松浦斤也「日記」）

菊池博子先生「校長先生に人形を燃せと言われたが、ナンボ敵の人形でも、こんな可愛い人形を燃す気になれない。人形に罪はないがね」と、図書室の本棚の奥の一番下の本の陰に隠し守り抜く。

⑧中城坪の獅子ヶ城と三古塚

獅子ヶ城は文明の頃（一四六九〜八六）、白河結城氏が家臣の深谷伊豆守顕衡、嫡子主馬四郎重安の父子に命じ、佐竹氏に備えるため築城させた難攻不落の平城。永正七年（一五一〇）、佐竹氏、白河結城氏の内紛に乗じ依上保を奪い、深谷氏は佐竹氏に降伏。

天文年間（一五三二〜五四）に深谷氏はまた旧主の白河結城氏方に属し、天文十八年（一五四九）に佐竹方の馬頭の武茂氏が来襲し、深谷伊豆守顕衡、嫡子主馬四郎重安は討死にして落城。

主馬城坪の古塚（嫡子重安の屍を葬った塚）\*新しい墓地が造成された辺りに古塚があった。

淵の上の首塚（討死した深谷氏家臣の首を埋めた塚）

淵の上の胴塚（討死した深谷氏家臣の胴体を埋めた塚）

\*「淵の上」くく搦手側は断崖絶壁、下を流れる中郷川は蛇行し澱みや淵があり、当時は水量も豊富なことから、首塚と胴塚はこの断崖上辺りか？

⑨誰も近寄らなかつた「ひき病院」跡

伝染病隔離病舎、明治三十一年、県内全市町村に設置義務、収容人数二十四人。昭和初期に閉鎖されるまでに百七十名が収容され、四十五名が死亡。

⑩移転を繰り返した「坂の豆腐屋」前のお地藏様と水飲み場

元々はキクヤの畑から出てきた首無し地藏く道路拡張で畑の上に移転（途端に水が出なくなる）  
畑の上ではお参りが不便で松美屋の裏に移転く豆腐屋跡の現在地に移転。

⑪火防の神様、愛宕さま

昭和四年の夏、上町の民家に落雷、火事となり八溝からの強風に煽られ辰巳（南東）の方角の下町

に飛火して類焼した。

この時「大森キシさんと大森盛さんが『下町には守り神の愛宕様があるのに、粗末にし誰もお祭りしてないからだ』と嘆いて、下町集落を歩き寄附を募りお宮を建て替えた」(大森静枝さん談) 愛宕様の祭礼(旧二月二十四日、六月二十四日)く御神輿担ぎは子供達の「いちばんの楽しみ」

## ⑫村の中心地、下町通り

役場、郵便局、駐在所、農協、病院、診療所、歯医者、種馬所、教員住宅、映画館など公共施設、萬屋、呉服屋、洋服屋、電気屋、ラジオ屋、時計屋、自転車屋、精米所、製麺所、床屋、パーマ屋、酒屋、魚屋、飲食店、和菓子屋、駄菓子屋、豆腐屋、製材所、石屋、畳屋、指物屋・・・

「デエゴ(大子)さ行がなくてもマツチギ(町付)で全て用足しができた」

## ⑬水戸威公(水戸藩初代頼房公)寄進の中ノ宮様の石灯笼

当地が水戸藩領となつて間もない寛永十一年(一六三四)、水戸藩初代藩主徳川頼房(家康の十一子、光圀の父君)の奉納による貴重な石鳥居。

石柱に刻まれた銘文は風化し判読難しいが、西柱の「大旦那源朝臣中納言頼房公」は歴然としていて判読可能である。

## ⑭ホッキリと大山九右衛門

昔の八溝川は丸山(崖山)にぶつかり西に迂回して流れる。出水の度、水害(大河原)となり、元禄年間(一六八八〜一七〇四)、大山九右衛門が隧道を掘り流れを変え、田畑を水害から守る。

村人、崖の上に記念碑を建て、九右衛門の功績を称える。碑銘は剥落し文字の痕跡さえとどめず。

## ⑮館の荒蒔城と姫塚

荒蒔城は永禄元亀の頃(一五五八〜七二二)、佐竹氏家臣の荒蒔駿河守為秀、舎弟豊後守秀実の兄弟が築城した要害堅固な山城。為秀に男子なく姫が二人(養子を貰う)

姫塚くくお姫様が自害(塚の高さ六尺、姫塚の所在く高德寺?館ノ山?)

姫の自害の理由

①秋田への国替えがヤデ、館の山のスッテンペンで自害(断崖から八溝川に飛び降り自殺)

②白川の一戦で養子が討死し、悲しみの余り自害

慶長七年(一六〇二)、佐竹氏に従い出羽秋田に移り、廢城となる。